



# 日本地球化学会ニュース

No. 254      September 2023

## Contents

学会からのお知らせ .....	2
● 日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2023 年大会報告	
● Goldschmidt 国際会議 2023 報告	
書評 .....	5
東日本大震災後の放射性物質と魚	

## 学会からのお知らせ

### ●日本地球惑星科学連合 (JpGU) 2023年大会報告

日本地球惑星科学連合 (Japan Geoscience Union; JpGU) の年次大会 (以下、連合大会) は、その前身である地球惑星科学関連学会合同大会を含めると1990年から開催されている、地球惑星科学に関連する日本最大の学術会議です。2020年と2021年はコロナ禍のため完全オンライン、2022年度は現地開催とオンラインのハイブリッド方式で開催され、今年は昨年に引き続きハイブリッド方式で開催されました。

口頭発表のセッションは、5月21日(日)から26日(金)にかけて幕張メッセ国際会議場(千葉県千葉市)と同国際展示場ホール8を会場として現地開催され、オンライン参加者もZoomを介して講演と視聴、質疑応答ができる完全なハイブリッド形式で行われました。ポスター発表は、オンライン学術会議システムConfit上のe-posterで掲示、コアタイムにZoomのブレイクアウトルームを利用してディスカッションを行うのが基本で、それに加えて、国際展示場ホール8のポスター会場でも紙(布)ポスターを掲示することができました。現地ではオンラインとは別にコアタイムが設けられ、対面でディスカッションを行うことができました。夕方のポスター発表のコアタイムにはドリンクコーナーがオープンし、コーヒーや各種ソフトドリンクを自由に飲むことができました(個人的にはノンアルコールビールが飲めたことに大変感激しました)。

今回の全発表論文数は4,395件、去年の3,808件に比べて15%増であり、2019年の87%まで回復しています。また、参加登録者数は7,868名と去年の全参加者数(6,789名)と比べて16%増であり、ほぼ2019年に近い水準となりました。現地来場者数は、昨年比84%増の5,802名で、ようやくコロナ禍も収束に向かってきたことがうかがえます。この現地来場者数の急増には、2023年5月8日(月)から新型コロナウイルス感染症の感染症法上の位置付けが、「新型インフルエンザ等感染症(2類相当)」から「5類感染症」に移行されたことも関係しているのかもしれませんが。

今回は、以下の8つのセッションが日本地球化学会の共催セッションとして開催されました。

A-HW19 [E] 水循環・水環境

A-CG41 [J] 沿岸海洋生態系-2. サンゴ礁・藻場・マングローブ

A-CG45 [J] 海洋表層-大気間の生物地球化学

S-VC30 [J] 火山の熱水系

S-GC38 [J] 固体地球化学・惑星化学

M-IS15 [J] 古気候・古海洋変動

M-IS19 [J] 冷湧水・泥火山・熱水の生物地球科学

M-TT38 [J] 地球化学の最前線

学生優秀発表賞の審査と表彰は例年通り行われ、680名を超える審査エントリー者の中から69名が表彰されました。日本地球化学会からは仁木創太会員(東京大学大学院)が受賞されました。おめでとうございます。

関連企業や学協会、大学・研究機関等による展示企画は、昨年に引き続き現地でのブース出展が可能となりました。日本地球化学会も現地出展し、理事にお手伝いいただき学会員入会の勧誘、ノベルティグッズ(オリジナルクリアファイルやボールペン、蛍光ペン)や東京年会をお知らせするチラシ、Geochemical Journalの杉崎隆一会員追悼特集号の配布を行いました。また昨年に引き続き、大会ウェブサイトのトップバナーページなどにバナー広告を掲載するほか、クイズラリーにも参加しました。今年のクイズは、地球化学の研究対象について問い、クイズの答え(地球に関することなら全て研究対象となる)を探しに多くの学生がブースを訪れました。中でも、初日は日曜日だったこともあり、大学の学部生以外に多くの小中高生がクイズの答えを探しにブースを訪れました。JpGUでのクイズラリーは、普段地球化学になじみのない学生層に向けて学会をアピールするよい機会となっているようです。

来年の連合大会は、2024年5月26日(日)から31日(金)まで、幕張メッセで開催される予定です。連合大会は、専門が異なる分野の研究者との交流や接点を作る絶好の機会です。来年も多くの日本地球化学会会員の皆様の積極的なご参加をお待ちしております。

(広報委員会JpGU担当 井尻 暁, 長島佳菜,  
広報担当幹事 角野浩史)

### ●Goldschmidt国際会議2023報告

Goldschmidt国際会議は、ヨーロッパ地球化学連合(European Association of Geochemistry: EAG)と米国地球化学会(Geochemical Society: GS)が主催、日本地球化学会が共催する国際学会で、地球化学関連分野では参加者数が最大規模の学会です。2023年の第33回会議は、対面とリモートを併用したハイブ

リッド形式にて、7月9日(日)から14日(金)までの6日間にわたる開催となりました。今回の開催地はフランス南東部に位置するリヨンにあるLyon Congress Centerで、昨年のハワイに引き続き、同じ場所で本来現地開催が予定されていたものの、コロナ禍の中でオンライン開催を余儀なくされた2021年から、2年後に仕切り直しての開催でした(ハワイは2020年オンライン開催、2022年現地開催でした)。会議後のEAGのニュースレターによると、参加者は4,500人を超えていたとのこと。今回の会議内容は、例年とほぼ同様に、基調講演をのぞく14に区分されたテーマのもと、各々のテーマがさらに6から11に細区分された全109セッションで構成され、個々の一般講演には、月曜～金曜の現地時間の午前と午後が対面とオンライン併用のハイブリッドの口頭発表と、午後の口頭発表終了後の夕方2時間が現地ポスター発表のための時間として設定されていました。加えて、午前の口頭発表の後に共通セッションとして月曜～金曜まで日替わりで約1時間の基調講演が1件設けられていたほか、さらにその後に学生・若手研究者向けの基調講演者とのディスカッションや、様々なキャリアパス紹介、ワークライフバランスの取り方に関するワークショップなどが企画されていました。学生・若手研究者向けプログラムとしては、日曜に、論文、研究費の申請書、論文の査読報告の書き方に関するワークショップが開催されていたほか、会期中に中堅～シニアの研究者と1対1で研究やキャリアについて相談できるMentor Programが組まれていました。筆者が参加したセッションの印象では、ほとんどの演者が会場で登壇しており、オンラインの発表者はセッションに数人いるかないかでした。会期の直前までフランス全土で暴動が発生していたために現地参加を見送ったという話も聴きましたので、何事もなければ現地参加者はもっと多かったかもしれません。一方、遠隔地から聴講のみでも比較的気軽に参加できたり、会期終了後の8月13日まで、アップロードされた発表ファイルや録画されたセッションの視聴等が可能となっているなど、ハイブリッド開催ならではのメリットは前回のハワイと同様でした。

会期中には各賞表彰が行われました。日本地球化学会に関連するものとして、今年のGJ論文賞はYoshiaki Endo et al. “Absorption spectra measurements at  $\sim 1\text{ cm}^{-1}$  spectral resolution of  $^{32}\text{S}$ ,  $^{33}\text{S}$ ,  $^{34}\text{S}$ , and  $^{36}\text{S}$  sulfur dioxide for the 206–220 nm region and applica-

tions to modeling of the isotopic self-shielding” *Geochemical Journal*, Vol. 56 (No. 1), pp. 40–56, 2022 でした。筆頭著者の遠藤美朗会員に対して南雅代会長から賞が授与され、受賞講演が行われました。また、GSより2020年にクレア・パターソン・メダル (Clair C. Patterson Medal) を受賞されていた吉田尚弘会員へ、メダルの授与式が行われました。



GJ論文賞受賞者の遠藤美朗会員(左)と南雅代会長(右)



2020年クレア・パターソン・メダル受賞者の吉田尚弘会員(左)とGS・Sumit Chakraborty会長(右)

日本地球化学会では、例年、本会議の共催学会として本会期中にブースを出展して広報活動を行っています。本ブースには、日本人参加者のみならず、海外からの参加者にも訪ねてきていただき、情報交換や待ち合わせの場としても利用していただいています。2019年以降しばらくはコロナ禍の影響で、バーチャル形式での広報活動に限られていましたが、本会議では昨年に引き続き、現地にてブース展示を行うことができました。ブースでは例年通り、学会ロゴの入ったボールペンやクリアファイル、学会パンフレットに加えてGJ特集号 (Frontiers in Geochemistry: Tribute to Professor Ryuichi Sugisaki) を無料配布しました。昨年のハワイではハイブリッド開催だったものの現地参加者は少なく、ブース訪問者も数えるほどで配布物がほとんど残ってしまい、日本からの持ち込みと

ハワイからの発送をしていただいた有志会員の方々にはご迷惑をおかけしてしまいましたが、今年は従来より5割増しの数のボールペンやクリアファイルを持ち込んだにもかかわらず、中日を過ぎたあたりでGJ特集号ともども全て捌けてしまいました。今回新たに用意したクリアファイルは非プラスチックの、石灰石を原料とする素材で作られたものであったため、昨今の脱プラの風潮もあり興味を持った人も多かったのかもしれませんが、いずれにしても人の集まりが元通りになってきたことが、このことから察せられます。GJの特集号も、GJへの投稿を考えており、どのような内容とレベルの論文が掲載されているか知りたいたらと言って持ち帰る若い研究者がいるなど、オンラインでフルオープンアクセス化をしていますが、冊子体の需要がそれなりにあることがわかりました。



日本地球化学会ブース

なお筆者も2019年のバルセロナ以来の現地参加で、海外の旧知の研究者と久しぶりに対面で再会して大い

に学会を楽しみましたが、羽目を外しすぎたのか(?) 2つほど痛い目に遭いました。1つ目は、美食の街として知られるリヨンに来たからには日本では食べられないものを食べようということで、ソースと絡めた生肉(タルタル)を牛、サーモンと続けて食べた結果、食あたりになりました。おかげで1日半ほど外出も食事もできず、かえってリヨンに来た甲斐がなくなってしまいました。宿で寝込んでいてもセッションでの講演をオンラインで聴けたことは、ハイブリッド開催に救われたと言えるのかもしれませんが。またもう1つは、帰国翌日にコロナウイルス感染症を発症したことでした。会期最終日の翌日にリヨンを発つまでに観光していた市場で感染したのか、その前日がフランス革命記念日(Bastille Day)であり、夜にリヨン歴史地区の一部として世界遺産登録もされているフルヴィエールの丘で花火が上がるというので、このご見に行った雑踏の中で感染したのかはわかりません。筆者以外にももう一名、ほとんど行動を共にしていなかった本会の会員の参加者がやはり帰国直後に発症されたと伺っていますし、世の中が平常になったように見えてもコロナウイルスはまだ身近に在ることを、まざまざと思い知らされました。

次回、来年の第34回 Goldschmidt 国際会議は、アメリカのシカゴにて8月18日(日)~8月23日(金)に開催予定です。その頃にコロナウイルスの感染状況がどうなっているのかはわかりませんが、現地開催のみであれハイブリッド開催であれ国際的な研究発表や交流の場として本会議の重要性は変わりませんので、奮ってご参加ください。

(広報幹事・現地ブース担当 角野浩史)



## 書評



『東日本大震災後の放射性物質と魚』

著者名: 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 編

ISBN: 978-4-425-88711-8

発行年月日: 2023/3/28

サイズ/頁数: A5判 184頁

価格: ¥2,200円 (税込)

2011年3月に起こった東日本大震災と福島第一原発事故から10年以上が経過しました。被災地である東北地方沿岸域は復興が進み、日常生活が戻りつつあります。一方、福島第一原発事故が起こった福島県沿岸域でも立ち入り禁止区域などの大部分は解除されましたが、最近ではトリチウムを含む処理水の放出が目立つなど、水産業を中心に未だに大きな爪痕が残されたままです。

福島第一原発事故による放射性物質の拡散については、自治体、学会、大学、など様々なスケールで組織的に研究やモニタリングが行われました。私たち地球化学会も事故直後から精力的に調査に取り組んだ組織の一つであり、それらの成果は、地球化学49巻4号特集「福島原発事故の地球化学：放射性核種の生成・飛散・移行」や同55巻4号特集「福島第一原子力発電所事故と地球化学：福島原発事故から10年を振り返って」などでもまとめられています。

本書の編著機関である水産研究・教育機構も、震災直後から放射性物質の調査研究に精力的に取り組んできた研究機関の一つです。特に、水産業の要である魚、その生息域である水域（海洋及び淡水域）の環境中の動態について重点的に調査研究が行われてきました。水産業は農産業と並んで、福島県沿岸域の重要な

産業であるとともに、福島第一原発事故の影響を強く受けた経済活動の一つでもあります。

本書は、東日本大震災から10年間の放射性物質の動態や、その水圏環境や魚への影響について、水産研究・教育機構の取り組みを含む科学的知見をとりまとめ、一般向けにわかりやすく解説したものです。一般向けという位置づけながらも、放射性物質というセンシティブなテーマについて説得力を持たせるために、論文や公的機関のデータを適切に引用して書かれています。専門的な内容を取り扱うため多少難解な表現は避けられないのですが、大学院生レベルであれば難なく読める程度の平易さになっています。震災から10年が経過し、現在の大学院生のなかには未曾有の大災害の詳細について知らない人も増えてきているでしょう。本書は放射性物質の動態を網羅的に取り扱っているため全体像を概観しやすく、かつ、適切に文献が引用されているため詳細な情報へのアクセスがしやすいという特徴があり、大学院生が学ぶために最適な一冊だと感じました。また、食物連鎖が行き着く先であり、経済活動の出口に相当し、地球化学会の皆さんが取り扱う機会があまり多く無い水産重要魚種について詳しく説明されています。社会経済活動という、地球化学会の主要研究成果である「環境・動態・素過程」などに関する貢献が行き着く先でもあるので、興味深く読んでもらえるのではと思います。

私が特に興味深く感じたのが、第七章の「風評被害の実態」です。本章は風評被害を科学的に分析・理解するという、地球化学とは全く異なる視点であり、現状の課題や今後必要とされる対応策などについてわかりやすく理解することができました。水産業の復興に寄り添ってきた水産研究・教育機構ならではの切り口であり、水産業の復興に貢献したいという意思が伝わってきました。福島の水産物の「ファンを増やす」ことが水産業の復興につながるそうで、放射能の影響を正しく理解できる地球化学会の会員が率先して福島の水産物を消費することで、福島の水産業の復興に貢献できるのではと感じました。水産業の復興は未だ道半ばであり、処理水の放出を控えた昨今、科学的根拠に基づかない風評被害をいかに減らして行くかは重要な課題です。本書で書かれているような福島の放射性物質の現状やその影響について、マスメディアなどを通じて広く浸透することにより風評被害が低減され、福島の水産業が速やかに復興することを切に願っています。

(東京大学大気海洋研究所 白井厚太郎)

### ニュースへ記事やご意見をお寄せください

地球化学に関連した研究集会、書評、研究機関の紹介などの原稿をお待ちしております。編集の都合上、電子メールでの原稿を歓迎いたしますので、ご協力の程よろしくお願いいたします。次号の発行は2023年12月頃を予定しています。ニュース原稿は11月中旬までにお送りいただくよう、お願いいたします。また、ホームページに関するご意見もお寄せください。

編集担当者（日本地球化学会）

中川書子  
〒464-8601 名古屋市千種区不老町  
名古屋大学大学院環境学研究科地球環境科学専攻  
Tel: 052-789-3464; Fax: 052-789-3436  
E-mail: news-hp@geochem.jp

角野浩史  
〒153-8904 東京都目黒区駒場4-6-1  
東京大学先端科学技術研究センター  
Tel: 03-5452-5096; Fax: 03-5452-5096  
E-mail: news-hp@geochem.jp